

平成 23 年 4 月 16 日

愛媛県知事 中村 時広様

四国電力株式会社社長 千葉 昭 様

伊方原発についての緊急要請

愛媛県保険医協会理事会

3月11日に発生したM9.0の巨大地震と津波によって、東京電力福島第一発電所が、停電に加え非常用電源も動かないという事態になり、炉心融解、原子炉格納容器の損傷、大量の放射性物質の放出という世界で最悪の原子炉災害を起こした。国内の原発には、電源を長時間失う事態への対策が用意されていないことが判明した。今まで地震や津波の危険性について専門家の指摘があったにも関わらず、電力会社も政府も原子力は安全だと強調してきた。「想定外」で済まされるだろうか。今や原発の「安全神話」は崩壊した。

放射性物質が外部環境に大量に排出され、住民の避難勧告や計画的避難勧告、農産物、土壌、海水、水道水から放射性物質が基準を上回って検出され、風評被害とあわせて、甚大な被害をもたらしている。

米国は自国民を80キロ圏外に避難するよう勧告している。1ヶ月を超えた今も事態の改善の目途はたっておらず、国際評価尺度での暫定評価でレベル7に引き上げられ、被害はますます予断をゆるさない状況にある。

津波を想定していなかった建造と、初動の遅れ、後手後手の対応による人災とも言える。

政府やテレビに出ている専門家が、環境汚染に対して「直ちに健康に影響はない」、海に放出された放射性物質は相当程度に薄まるので、「住民への直接の影響はない」と言うたびに、国民には「そのうち影響が出ますよ」と言っているように聞こえる。事実を隠さずに正確に国民に伝えるべきである。

原発の敷地内からプルトニウムが検出された。毒性が強く体内に取り込まれると肝や骨に沈着し、長期にわたって周辺の細胞にアルファ線を出す。また、30キロ圏外でも土壌や植物からストロンチウムが検出された。体内に入ると骨に蓄積しベータ線を出す。半減期が8日の放射性ヨウ素が強調されているが、報道されていないこれらの放射性物質は半減期が長く、たとえ少量であっても内部被曝では発癌などの晩発性障害を起こし、安全の閾値はない。

伊方原発3号機は、福島原発3号機と同じように、MOX燃料を使用して、最も有毒なプルトニウムを使用したプルサーマルを実施している。プルサーマルはウラン燃料に比べ融点が低いので炉心融解を進める可能性がある。

伊方沖には活断層があり、今世紀中には南海地震も起こると言われており、福島の出来事は、よそ事とは言っておれない。

再生可能なエネルギーである、風力と太陽、バイオマス、小規模水力による発電の合計が原発を上回った。危険な原発から順次再生可能なエネルギーに転換すべきではないでしょうか。

以上のことから伊方原発に対して次の事を要請する。

1. 福島の経験を生かし新しい安全基準を作って伊方原発の総点検をする
2. 34年になる老朽化した1号機を廃炉にする
3. 3号機の危険なプルサーマルを中止する
4. 29年になり耐用年数が近い2号機の運転延長を中止する